

機関番号	研究種目番号	審査区分番号	細目番号	分割番号	整理番号
12611	13	-	3103		0001

平成25年度 (2013年度) 若手研究 (B) 研究計画調書

平成 24 年10月19日
0版

新規

研究種目	若手研究(B)						
分野	人文学						
分科	文学						
細目	ヨーロッパ文学						
細目表 キーワード	比較文学						
細目表以外の キーワード							
研究代表者 氏名	(フリガナ)	タナカ タクゾウ					
	(漢字等)	田中 琢三					
年齢 (H25.4.1現在)	39 歳 (S . 48年10月生まれ)						
所属研究機関	お茶の水女子大学						
部局	大学院人間文化創成科学研究科						
職	助教						
学位	博士 (文学)						
現在の専門	フランス文学、比較文学				レポート	40%	
研究課題名	近代日本におけるポール・ブルジェとフランス伝統主義の受容						
研究経費 〔千円未満の 端数は切り 捨てる〕	年度	研究経費 (千円)	使用内訳 (千円)				
			設備備品費	消耗品費	旅費	人件費・謝金	その他
	平成25年度	1,470	900	100	100	300	70
	平成26年度	1,100	600	0	400	30	70
	平成27年度	1,100	600	0	400	30	70
	平成28年度	0	0	0	0	0	0
	総計	3,670	2,100	100	900	360	210
開示希望の有無	審査結果の開示を希望する						

研究目的

本欄には、研究の全体構想及びその中で本研究の具体的な目的について、冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述した上で、適宜文献を引用しつつ記述し、特に次の点については、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。(記述に当たっては、「科学研究費助成事業における審査及び評価に関する規程」(公募要領 66 頁参照)を参考にしてください。)

研究の学術的背景(本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ、応募者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯、これまでの研究成果を発展させる場合にはその内容等)

研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか

当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

研究目的(概要) 当該研究計画の目的について、簡潔にまとめて記述してください。

本研究の目的は、フランスの作家ポール・ブルジェ (1852-1935) の近代日本における受容のあり方とその背景を明らかにすることである。具体的には、ブルジェの小説や彼の伝統主義的なイデオロギーが、おもに明治・大正期から第二次世界大戦期にかけて、日本のアカデミズムや出版界で、どのように紹介され、受け入れられたのかを実証的に調査、研究する。そして、皇国史観の代表的な歴史家とされる平泉澄 (1895-1984) のブルジェ受容を中心に、近代日本の国家主義的イデオロギーにおけるフランス伝統主義の影響とその射程を検討する。

研究の学術的背景

従来の日本のフランス文学研究では、オノレ・ド・バルザック (1799-1850) に代表される 19 世紀の近代小説やマルセル・ブルースト (1871-1922) を端緒とする 20 世紀の現代小説に関しては盛んに研究がなされてきた。しかし 19 世紀末から 20 世紀初頭の世紀転換期の小説については、その量的な多さと質的な多様性にも関わらず、日本ではほとんど研究の対象にされることはなく、本国フランスにおいても研究が少ないという状況がある。申請者は、この小説史研究の空白を埋めるために、世紀転換期の小説、特にドレフュス事件の影響下で多く書かれたイデオロギー色の強い思想小説を中心に研究を進めてきた。

具体的には、まず、応募者が平成 17 年 3 月にパリ第 4 大学で学位を取得した博士論文『ゾラと心理小説』*Zola et le roman psychologique* (研究業績 13) の第二部の後半で、世紀転換期に書かれたエミール・ゾラ (1840-1902) の思想小説を取り上げて、登場人物の心理描写において作者の哲学やイデオロギーがどのように反映され、表象されているのかを検討した。

さらに、平成 18 年度から平成 20 年度まで、日本学術振興会特別研究員 (PD) として「エミール・ゾラ『三都市』『四福音書』から 20 世紀小説への展開」という研究題目のもとで、博士論文で扱った世紀転換期のゾラの小説だけではなく、同時代のブルジェやモーリス・バレス (1862-1923) らの思想小説を取り上げて、それらの作品を比較、検討することによって、世紀転換期フランスの思想小説のいくつかの特徴や問題系を明らかにした (研究業績 7~9)。

そして、平成 22 年度から現在に至るまで、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センターの研究プロジェクト「近現代日本におけるフランス文化の影響」に参加し、日本におけるフランス文学の政治的検閲をテーマに研究を進めているが、その一環として、政治的イデオロギーが強く反映されたゾラやブルジェの思想小説が、近代日本においてどのように受容され、検閲を受けたのかを調査、研究してきた。その過程で、現在では読まれなくなったブルジェの著作、特に保守的なイデオロギーを擁護する彼の思想小説が、明治・大正期からアカデミズムで研究され、特に第二次世界大戦期には国家主義的イデオロギーの台頭と軌を一にするように盛んに翻訳されていたことが判明した。

しかし、こうした戦前の日本におけるブルジェの文学的、思想的な重要性にもかかわらず、村田裕和の「仏蘭西学会の設立と伝統主義論争」(『比較文学』第 50 巻、2007 年、94-107 頁) や倉智恒夫の「芥川龍之介における『パステル』」(『比較文学』第 35 巻、1994 年、25-37 頁) で論じられている以外は、ブルジェの受容に関しての研究はほとんど存在しない。この研究の欠落を埋めるために、応募者は、近代日本のブルジェの作品や彼の伝統主義的イデオロギーの受容について、政治的、社会的状況や国家主義的イデオロギーとの関係を視野に入れながら、多角的、総合的に研究するという計画を着想するに至った。

研究目的(つづき)

研究期間内に何をどこまで明らかにするのか

これまでの研究成果を踏まえながら、プールジェと彼に代表される世紀転換期フランスの伝統主義が、おもに明治・大正期から第二次世界大戦期にかけて日本でどのように受容されたのかを実証的な資料文献の調査に基づいて明らかにする。また、プールジェとイデオロギー的に近い立場にあったバレスら同時代の伝統主義の作家たちの受容に関しても並行して研究を進める。

まず、基礎的な作業として、プールジェの作品の翻訳、あるいはこの作家に関する研究書、新聞や雑誌の記事などの文献資料を調査して網羅的なデータベースを作成する。そのうえで、明治期以来、プールジェやフランスの伝統主義を翻訳や研究によって積極的に日本に紹介した学者や文学者に着目し、近代日本における知識人と政治との関係を視野に入れながら、アカデミズムの世界でプールジェがどのように受け入れられたのかを考察する。

次に、第二次世界大戦期、つまり戦時下という極めて特殊な状況におけるプールジェの受容について研究する。この時期にプールジェの小説がベストセラーとなり、それを契機に彼の作品が次々に翻訳、刊行されることになったが、本研究では、同時代の書評や新聞、雑誌の記事などを手がかりに、当時の出版界の状況も考慮しながら、戦時下の日本で、プールジェの小説がなぜ多くの一般読者に読まれることになったのかを検討し、その政治的、社会的背景を解明する。

さらに、戦前の日本の皇国史観を代表するイデオログとされる平泉澄のプールジェ受容について重点的に研究を進める。平泉の著作、講演記録、日記などを精読して、彼がプールジェの思想をどのように摂取したのかを明らかにするとともに、近代日本の国家主義的イデオロギーにおけるフランス伝統主義の影響とその射程を検討する。

学術的な特色・独創的な点、予想される結果と意義

近代日本におけるフランス文学の受容については、すでに富田仁の著作など膨大な先行研究が存在するが、その多くは、翻訳をめぐる問題や、描写の方法やテーマの選択といった美学的な次元における比較研究が中心であった。それに対して、応募者は、プールジェという具体例を通して、もっぱら政治的イデオロギーの観点から照射した仏文学受容の研究を目指しており、この点に本研究の最大の特色がある。とりわけ、平泉澄とプールジェの関係については、これまで平泉の研究者が伝記的事実として言及する程度であり、本格的な研究は行われていない。したがって、今回の応募者の研究によって、平泉のプールジェ受容に関する革新的な発見や知見が導き出されることが予想される。

他方で、プールジェが日本の一般読者に読まれたのはおもに第二次世界大戦期であるが、この時期のプールジェ受容の解明は、従来あまり研究されてこなかった戦時下におけるフランス文学受容の一側面に光をあてることにもなる。また、外国の文化や思想の摂取においては多かれ少なかれ受容する側の取舍選択が作用するが、日本の仏文学受容においてもそうした選択が働き、フランス文学に対する偏ったイメージが形成されてきた。本研究では、とりわけ戦前の日本の政治的、社会的状況と関係が深いプールジェの受容のあり方を明らかにすることによって、近代の日本が、知識人のレベルにおいて、あるいは一般読者のレベルにおいて、フランス文学から何を摂取し、何を摂取しなかったのかというより大きな問題を考える手がかりになるであろう。

さらに、プールジェは世紀転換期フランスの重要なイデオログであるにもかかわらず、おそらくその保守的で国家主義的な傾向のために、戦後の日本ではこの作家の研究がほとんど行われていない。しかし、フランスにおいては2005年3月にプールジェの国際シンポジウムが開催されるなど、特に英仏では現在でもプールジェの研究が盛んである。本研究は、日本におけるプールジェ研究を活性化させるだけでなく、近代日本の国家主義的イデオロギーとの比較によって、プールジェの伝統主義の特性を浮き彫りにするという独自の視座を持つものであり、世界のプールジェ研究の進展に大きな貢献をすることが期待できる。

研究機関名 お茶の水女子大学

研究代表者氏名

田中琢三

研究計画・方法

本欄には、研究目的を達成するための具体的な研究計画・方法について、冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述した上で、平成25年度の計画と平成26年度以降の計画に分けて、適宜文献を引用しつつ記述してください。ここでは、研究が当初計画どおりに進まない時の対応など、多方面からの検討状況について述べるとともに、次の点についても、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。

本研究を遂行する上での具体的な工夫（効果的に研究を進める上でのアイデア、効率的に研究を進めるための研究協力者からの支援等）

研究計画を遂行するための研究体制について、研究代表者及び必要に応じて研究協力者（海外共同研究者、科研費への応募資格を有しない企業の研究者、大学院生等（氏名、員数を記入することも可））の具体的な役割（図表を用いる等）

研究代表者が、本研究とは別に職務として行う研究のために雇用されている者である場合、または職務ではないが別に行う研究がある場合には、その研究内容と本研究との関連性及び相違点

なお、研究期間の途中で研究環境が大きく変わる場合は、研究実施場所の確保や研究実施方法等についても記述してください。

研究計画・方法（概要） 研究目的を達成するための研究計画・方法について、簡潔にまとめて記述してください。

本研究は平成25年度から平成27年度にかけての3年間で実施する。まず、平成25年度は、日本のブルジェ関連の文献資料を調査、収集し、それらをデータベース化する作業を行いながら、戦前の日本のアカデミズムにおけるブルジェの受容のあり方とその背景を明らかにする。そして、平成26年度以降は、第二次世界大戦期の戦時下の日本において、ブルジェがどのように読まれていたのかを、皇国史観の代表的な歴史家である平泉澄への思想的影響を中心に考察する。研究成果は国内外の学会で発表するとともに、応募者の個人HP（準備中）で随時公開する。また、積極的に日仏の研究者と情報交換を行って、それを本研究にフィードバックさせる。

研究計画・方法(平成25年度)

本研究では、応募者がこれまでフランス文学の専門家として行ってきた研究成果を踏まえて、あくまで実証的な資料文献の調査に立脚しながら、ブルジェやフランスの伝統主義的イデオロギーが近代日本においてどのように受容されたのかを明らかにする。

初年度にあたる平成25年度は、まず、本研究の基盤となる作業として、日本で出版されたブルジェ関連の文献資料を網羅的に調査、収集する。具体的には、国立国会図書館などの各種図書館や古書店などを利用して、明治・大正期から今日までに刊行されたブルジェの著作の翻訳書の実物を可能な限り閲覧、入手し、それらの前書き、解説、あるいは刷数を調べることによって当時の出版状況を知る手がかりにするとともに、伏字やページの裁断などの検閲の有無を確認したい。さらに、インターネットなどを活用して、ブルジェや関連作家に関する研究書や論文、新聞や雑誌の記事を探索し、それらを綿密に読んでいきたい。また、収集した文献資料の情報は、順次パソコンに集積してデータベースを構築し、応募者の個人HP（準備中）において研究成果とともに随時公開する予定である。

そして、資料文献の調査を進めると同時に、戦前の日本のアカデミズムにおけるブルジェの受容について研究する。ブルジェの名前は、明治時代の後半からフランス文学を代表する小説家のひとりとして、ゾラやギィ・ド・モーパッサン（1850-1893）の名とともに我が国に知られていたが、ブルジェの作品や思想が本格的に紹介されるのは、1891年に東京帝国大学仏蘭西文学科の初代教授としてフランス人のエミール・ルイ・エック（1866-1943）が着任して以降であると考えられる。エックは大学の講義でブルジェやバレスら同時代のフランス伝統主義の文学を講じ、その後、彼の教え子である仏文研究者、例えば、慶應義塾大学の広瀬哲士（1883-1952）、南山大学教授の木村太郎（1899-1989）そして、とりわけ京都帝国大学教授の太宰施門（1889-1974）によってブルジェの翻訳や研究がなされていく。こうした経緯は前述した村田裕和の論文で部分的に指摘され、エックに関しては西堀昭の論文「エミール・ルイ・エック（1866-1943）」（『近代日本史の新研究III』、北樹出版、1984、33-64頁）が存在するが、本研究ではこれらの先行論文で明らかにされた事柄を踏まえながら、アカデミズムの世界におけるブルジェ受容について、より詳細により網羅的に研究を進めていきたい。具体的なアプローチとしては、例えば、『伝統主義の文学』（1917）から『ブルジェ前後 1870-1914』（1946）に至る太宰施門の一連のブルジェ研究を読み解いて、その特徴や射程を明らかにする、あるいは、戦前の日本で厳しい検閲を受けたゾラやモーパッサンらのフランス自然主義小説の受容と、ブルジェやバレスらの伝統主義の小説の受容のあり方を比較することなどを計画している。

研究計画・方法(つづき)

研究計画・方法(平成 26 年度以降)

平成 26 年度以降は、前年度に引き続き文献資料のデータベース化と個人 HP での研究成果の公開を進めるとともに、第二次世界大戦期におけるブルジェの受容について調査、研究を進める。この時期は、ブルジェの小説『死』が 1939 年にベストセラーになるという一般読者のレベルでの受容と、東京帝国大学国史学科教授で歴史家の平泉澄によるブルジェの伝統主義イデオロギーの摂取と紹介という知識人レベルでの受容が見られるが、この二つのレベルの受容が、戦時下という特殊な政治的、社会的状況とどのように関係しているのかを解明したい。応募者は、すでにブルジェの『死』の受容に関する論文(研究業績 3)を発表し、日本におけるこの小説の受容とアカデミズムとの関係を考察した。本研究では、この論文で十分に検討できなかった問題、つまり『死』やその後に相次いで翻訳、出版された他のブルジェの小説が、戦時下の日本で、特に一般読者によってどのように読まれていたのかを探るために、当時の新聞、雑誌の記事や書評などを網羅的に調査する。

そして、皇国史観の代表的な歴史家とされる平泉澄のブルジェ受容について重点的に研究する。平泉は 1930 年から翌年にかけてヨーロッパに留学するが、そのフランス滞在中にブルジェの著作を読んで感銘を受け、晩年のブルジェ本人と文通をした。その後、平泉はブルジェの手紙による示唆を手がかりにフランス伝統主義の研究を進め、その成果といえる論文集『伝統』を 1941 年に発表した。本研究では『伝統』をはじめとするブルジェに関して言及した平泉の著作、講演記録、自伝、インタビュー、公刊されていない留学時代の日記などを読み解き、必要があればフランスに赴いて調査、資料収集を行うことによって、平泉がブルジェのいかなる著作を読み、どのような思想的影響を受けたのかを明らかにしたい。近年では、平泉や皇国史観に関する研究がにわかに盛んとなっており、特に政治思想史の分野では植村和秀の『丸山眞男と平泉澄』(2004)などによって平泉神学の再検討が進められているが、こうした最新の研究成果を視野に入れながら、世紀転換期フランスの伝統主義と近代日本の国家主義的イデオロギーの関係性を考察する。さらに、第一次世界大戦期のブルジェと第二次世界大戦期の平泉が、伝統主義のイデオログとして戦時期にどのように政治と関係していたのかを比較、検討することによって、日仏の知識人における政治参加のあり方の相違や共通点を明らかにしたい。そして、こうした研究を進めながら、フランスで行われる研究会やシンポジウムに参加し発表するなど、積極的に研究成果の国際発信を行う予定である。

本研究を進める上での具体的な工夫と研究体制

本研究は基本的には単独で行うが、応募者が中心的なメンバーとして参加しているお茶の水女子大学の研究プロジェクト「近現代日本におけるフランス文化の影響」と連携しながら研究を進めたい。具体的には、応募者がプロジェクトの枠内で研究報告を行い、日仏比較文化を専門とする他のメンバーと議論をして、そこで得られた新たな情報や様々な見解を本研究にフィードバックさせる。さらに、国内の平泉澄の研究者との協力体制を確立するとともに、インターネットを活用しながら、海外のブルジェ研究者、例えば、イギリスのリーズ大学のリチャード・ヒビット、フランスのパリ第 4 大学のアンドレ・ギュイヨーやボルドー第 3 大学のベアトリス・ラヴィルらと情報交換を行い、常に国際的な動向を視野に入れながら本研究を実施する。

他の研究と本応募課題の関連性及び相違点

応募者が研究分担者として加わった新規応募中の基盤研究(C)「世界文学としてのアンデルセン『人魚姫』の超領域的研究と教養教育への応用モデル」(平成 25 年度～平成 29 年度、研究代表者：中丸禎子)は、『人魚姫』の各国での受容をテーマとして、他の外国語文学の専門家と共同で実施する研究プロジェクトである。このプロジェクトに参加して比較文学研究について他分野の研究者と意見交換することは、同じ比較文学を扱う本研究を進めるうえで有益であると思われる。

研究機関名	お茶の水女子大学	研究代表者氏名	田中琢三
-------	----------	---------	------

研究業績

本欄には、これまでに発表した論文、著書、産業財産権、招待講演のうち、主要なものを選定し、現在から順に発表年次を過去にさかのぼり、通し番号を付して記入してください。なお、学術誌へ投稿中の論文を記入する場合は、掲載が決定しているものに限ります。

発表論文名・著書名 等

(例えば発表論文の場合、論文名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年(西暦)について記入してください。)
(以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。著者名が多数にわたる場合は、主な著者を数名記入し以下を省略(省略する場合、その員数と、掲載されている順番を 番目と記入)しても可。なお、研究代表者には下線を付してください。)

- 1 . 田中琢三, 「フランス自然主義文学と検閲～ルイ・デプレの裁判をめぐる」, 『お茶の水女子大学人文科学研究』, お茶の水女子大学, 第 8 巻, 2012 年, pp.109-118. (論文・査読有)
- 2 . 田中琢三, 「ジュール・ユレのアンケートにおける世代の問題～19 世紀末の小説の状況に関する一考察」, 『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』, 日本フランス語フランス文学会関東支部, 第 19 号, 2011 年, pp.143-155. (論文・査読有)
- 3 . 田中琢三, 「ポール・ブルジェ『死』と二つの世界大戦～戦時下の日本における仏文学受容の一側面」, 『比較日本学教育研究センター研究年報』, お茶の水女子大学比較日本学研究センター, 第 7 号, 2011 年, pp.293-300. (論文・査読無)
- 4 . 田中琢三, 「ゾラにおける「正義」の観念について」, 『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』, 日本フランス語フランス文学会関東支部, 第 17 号, 2009 年, pp.55-67. (論文・査読有)
- 5 . 田中琢三, 「ゾラのオペラにおけるイデオロギーの表象～『メシドール』を中心に」, 『国際交流研究』, フェリス女学院大学国際交流学部, 第 11 号, 2009 年, pp.165-186. (論文・査読無)
- 6 . 田中琢三, 「ゾラのパンテオン葬と終わりなきドレフュス事件」, 北海道大学文学部・大学院文学研究科, 2009 年 12 月 17 日. (招待講演)
- 7 . Takuzo TANAKA, 《Rome fin de siècle chez Bourget et chez Zola》, 『フランス語フランス文学研究』, 日本フランス語フランス文学会, 第 92 号, 2008 年, pp.34-50. (論文・査読有)
- 8 . Takuzo TANAKA, 《Le scandale de Panama chez Zola et chez Vogüé》, 『仏語仏文学研究』, 東京大学仏語仏文学研究会, 第 35 号, 2007 年, pp.305-313. (論文・査読有)
- 9 . 田中琢三, 「イデオロギー小説における時間～バレス『国民的エネルギーの小説』をめぐる」, 『フランス文学における時間意識の変化』(平成 16-18 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))による研究成果報告書 研究代表者: 塚本昌則), 2007 年, pp.27-36. (論文・査読無)
- 10 . 田中琢三, 「エミール・ゾラと『死せる女の願い』」, 『仏語仏文学研究』, 東京大学仏語仏文学研究会, 第 32 号, 2006 年, pp.81-95. (論文・査読有)
- 11 . 田中琢三, 「ゾラにおけるパリ郊外～ノスタルジーとユートピア」, 『聖域の表象と文学表現～新古典主義からロマン主義へ』(平成 16-17 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))による研究成果報告書 研究代表者: 田村毅), 2006 年, pp.85-91. (論文・査読無)
- 12 . Takuzo TANAKA, *Zola et le roman psychologique*, Lille, Atelier national de reproduction des thèses, 2005. (著書)
- 13 . Takuzo TANAKA, 《L'esthétique de la psychologie de Zola》, 『仏語仏文学研究』, 東京大学仏語仏文学研究会, 第 27 号, 2003 年, pp.223-236. (論文・査読有)
- 14 . Takuzo TANAKA, 《Zola et le roman idéaliste à la Sand》, 『仏語仏文学研究』, 東京大学仏語仏文学研究会, 第 26 号, 2002 年, pp.253-267. (論文・査読有)

研究業績(つづき)

15. Takuzo TANAKA, 《 *Fécondité de Zola contre la littérature fin de siècle* 》, 『仏語
仏文学研究』, 東京大学仏語仏文学研究会, 第25号, 2002年, pp.181-188. (論文・査読有)

16. 田中琢三, 「ある自然主義文学論～ポール・ブルジェ『現代心理論集』をめぐって」, 『仏
語仏文学研究』, 東京大学仏語仏文学研究会, 第20号, 2000年, pp.39-46. (論文・査読有)

17. 田中琢三, 「ゾラとショーペンハウアーの厭世哲学～『生きるよろこび』をめぐって」, 『仏
語仏文学研究』, 東京大学仏語仏文学研究会, 第19号, 1999年, pp.29-38. (論文・査読有)

研究計画と研究進捗評価を受けた研究課題の関連性

- ・本欄には、本応募の研究代表者が、平成23年度又は平成24年度に、「特別推進研究」、「基盤研究(S)」、「若手研究(S)」又は「学術創成研究費」の研究代表者として、研究進捗評価を受けた場合に記述してください。
- ・本欄には、研究計画と研究進捗評価を受けた研究課題の関連性(どのような関係にあるのか、研究進捗評価を受けた研究を具体的にどのように発展させるのか等)について記述してください。

該当なし

今回の研究計画を実施するに当たっての準備状況及び研究成果を社会・国民に発信する方法

- 本欄には、次の点について、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。
本研究を実施するために使用する研究施設・設備・研究資料等、現在の研究環境の状況
研究協力者がいる場合には、必要に応じその者との連絡調整の状況など、研究着手に向けての状況
本研究の研究成果を社会・国民に発信する方法等

応募者は、専任教員として所属するお茶の水女子大学の附属図書館を通じて、全国の大学図書館にある資料文献を取り寄せることが可能であり、また、特に所属大学の日文図書室には、本研究に必要とされる近代日本で出版された書籍や定期刊行物などが豊富に所蔵されている。こうした図書館の活用に加えて、インターネット上の電子化された論文や資料をダウンロードする方法で、すでに関係資料の収集を開始している。研究成果を発信する方法としては、現在準備中の個人HPで、論文や文献資料の情報を随時公表しながら、平成25年7月に開催予定のお茶の水女子大学比較日本学教育研究センター主催の「第15回国際日本学シンポジウム」で発表し、その発表をもとにした論文を紀要『比較日本学教育研究センター研究年報』に掲載する。そして、平成26年度以降は、日本比較文学会の各大会で発表を行うとともに、フランスで開催される研究会やシンポジウムに参加して研究成果を積極的に国際発信したい。

研究略歴

本欄には、最終学校卒業後の研究履歴を現在から順に年度をさかのぼって記入してください。その際、どのような研究を行ったのか、研究内容とともに特筆すべき事項（受賞歴等）を簡潔に記入してください。

2010年4月～現在に至る

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科の助教として、19世紀末～20世紀初頭のフランス思想小説についての研究を行うとともに、お茶の水女子大学の比較日本学教育研究センターのプロジェクト「近現代日本におけるフランス文化の影響」に参加し、日本におけるフランス文学の受容と検閲の問題を中心に研究を進めている。

2006年4月～2009年3月

明治学院大学言語文化研究所の日本学術振興会特別研究員（PD）として、19世紀末～20世紀初頭のエミール・ゾラの作品や同時代の思想小説における政治的イデオロギーの表象についての研究を行った。

人権の保護及び法令等の遵守への対応（公募要領5頁参照）

本欄には、研究計画を遂行するにあたって、相手方の同意・協力を必要とする研究、個人情報の取り扱いの配慮を必要とする研究、生命倫理・安全対策に対する取組を必要とする研究など法令等に基づく手続きが必要な研究が含まれている場合に、どのような対策と措置を講じるのか記述してください。

例えば、個人情報を伴うアンケート調査・インタビュー調査、提供を受けた試料の使用、ヒト遺伝子解析研究、組換えDNA実験、動物実験など、研究機関内外の倫理委員会等における承認手続きが必要となる調査・研究・実験などが対象となります。

なお、該当しない場合には、その旨記述してください。

該当なし

研究経費の妥当性・必要性

本欄には、「研究計画・方法」欄で述べた研究規模、研究体制等を踏まえ、次頁以降に記入する研究経費の妥当性・必要性・積算根拠について記述してください。また、研究計画のいずれかの年度において、各費目（設備備品費、旅費、人件費・謝金）が全体の研究経費の90%を超える場合及びその他の費目で、特に大きな割合を占める経費がある場合には、当該経費の必要性（内訳等）を記述してください。

設備備品のパソコン、プリンター、スキャナーは論文作成やインターネットによる情報収集、文献資料のデータベース化のために使用するが、研究期間中はそれらを買替える必要はないと思われるので、その経費は初年度の平成25年度のみ計上している。研究経費全体の半分を占める「日仏文学関連図書」は、各種の辞書類（CD-ROM版を含む）や対象となる日仏の作家や学者の著作や彼らに関する研究書などであるが、それらは本研究の基盤となるものであり、特に明治・大正期に出版された書物は高価であるので、多額の経費が必要であると判断した。平成25年度の人件費・謝金における「講演料」は、応募者が中心となって企画している日仏比較文化をテーマとした「第15回国際日本学シンポジウム」（お茶の水女子大学で平成25年7月開催予定）に参加する予定の数名の講演者への謝金である。また、平成26年度と平成27年度にフランスでの調査、資料収集と研究発表を予定しているが、その旅費を、往復の航空運賃として20万円、7日間の宿泊費や日当として10万円、合計30万円を計上している。

研究機関名 | お茶の水女子大学

研究代表者氏名 | 田中琢三

若手(B) - 9
(金額単位：千円)

設備備品費の明細			消耗品費の明細	
[記入に当たっては、若手研究(B)研究計画調書作成・記入要領を参照してください。]			[記入に当たっては、若手研究(B)研究計画調書作成・記入要領を参照してください。]	
年度	品名・仕様 (数量×単価)(設置機関)	金額	品名	金額
25	日仏文学関連図書	600	レーザー複合機用トナーカートリッジ	50
	デスクトップパソコン(ソニー製 型番 VPCJ228FJ/W) 1台	200	USBメモリ	30
	レーザー複合機(ブラザー製 型番 MFC-9120CN) 1台	80	印刷用紙	20
	スキャナー(キャノン製 型番 DR-150) 1台 (すべてお茶の水女子大学)	20		
	計	900	計	100
26	日仏文学関連図書 (お茶の水女子大学)	600		
	計	600	計	0
27	日仏文学関連図書 (お茶の水女子大学)	600		
	計	600	計	0

若手(B) - 10

(金額単位：千円)

旅費等の明細 (記入に当たっては、若手研究(B)研究計画調書作成・記入要領を参照してください。)								
年度	国内旅費		外国旅費		人件費・謝金		その他	
	事項	金額	事項	金額	事項	金額	事項	金額
25	学会等の発表 旅費	100			講演料	300	複写費	50
							学会費	20
	計	100	計	0	計	300	計	70
26	学会等の発表 旅費	100	資料収集・調 査旅費 パリ 7日間	300	論文校閲	30	複写費	50
							学会費	20
	計	100	計	300	計	30	計	70
27	学会等の発表 旅費	100	研究会等の発 表旅費 パリ 7日間	300	論文校閲	30	複写費	50
							学会費	20
	計	100	計	300	計	30	計	70
研究機関名		お茶の水女子大学			研究代表者氏名		田中琢三	

研究費の応募・受入等の状況・エフォート

本欄は、第2段審査(合議審査)において、「研究資金の不合理な重複や過度の集中にならず、研究課題が十分に遂行し得るかどうか」を判断する際に参照するところですので、本人が受け入れ自ら使用する研究費を正しく記載していただく必要があります。本応募課題の研究代表者の応募時点における、(1)応募中の研究費、(2)受入予定の研究費、(3)その他の活動、について、次の点に留意し記入してください。なお、複数の研究費を記入する場合は、線を引いて区別して記入してください。具体的な記載方法等については、研究計画調書作成・記入要領を確認してください。

「エフォート」欄には、年間の全仕事時間を100%とした場合、そのうち当該研究の実施等に必要となる時間の配分率(%)を記入してください。

「応募中の研究費」欄の先頭には、本応募研究課題を記入してください。

科研費の「新学術領域研究(研究領域提案型)」にあつては、「計画研究」、「公募研究」の別を記入してください。

所属研究機関内で競争的に配分される研究費についても記入してください。

(1) 応募中の研究費

資金制度・研究費名(研究期間・配分機関等名)	研究課題名(研究代表者氏名)	役割(代表・分担の別)	平成25年度の研究経費(期間全体の額)(千円)	エフォート(%)	研究内容の相違点及び他の研究費に加えて本応募研究課題に応募する理由(科研費の研究代表者(又は拠点リーダー等のようにプログラム全体の研究費の受入研究者)の場合は、研究期間全体(又はプログラム全体)の受入額を記入すること)
【本応募研究課題】 若手研究(B) (H25~H27)	近代日本におけるポール・ブルジェとフランス伝統主義の受容(田中琢三)	代表	1,470 (3,670)	40	本研究と他の研究は、テーマは異なるが同じ比較文学研究であり、並行して実施することで、より相対的で多角的な視野を得ることができると考えた。(総額3,670千円)
基盤研究(C)(一般) (H25~H29)	世界文学としてのアンデルセン『人魚姫』の超領域的研究と教養教育への応用モデル(中丸禎子)	分担	55 (275)	20	

研究費の応募・受入等の状況・エフォート(つづき)					
(2) 受入予定の研究費					
資金制度・研究費名(研究期間・配分機関等名)	研究課題名(研究代表者氏名)	役割(代表・分担の別)	平成25年度の研究経費(期間全体の額) (千円)	エフォート(%)	研究内容の相違点及び他の研究費に加えて本応募研究課題に応募する理由 (科研費の研究代表者(又は拠点リーダー等のようにプログラム全体の研究費の受入研究者)の場合は、研究期間全体(又はプログラム全体)の受入額を記入すること)
(3) その他の活動 〔上記の応募中及び受入予定の研究費による研究活動以外の職務として行う研究活動や教育活動等のエフォートを記入してください。〕				40	
合計 (上記(1)、(2)、(3)のエフォートの合計)				100 (%)	
研究機関名	お茶の水女子大学		研究代表者氏名	田中琢三	